

中国における初期プロテスタント布教の歴史 ——宣教師の「異教徒」との出会いを通して——

倉 田 明 子

はじめに

プロテスタントによる中国布教は、1807年に広州にやってきたロンドン伝道会の宣教師ロバート・モリソン (Robert Morrison) によって始まった。日本における中国キリスト教史の代表的研究者である山本澄子は、『中国キリスト教史研究』においてプロテスタント布教史を4つの時代に区分している¹⁾。その第1期は1860年の北京条約までとされ、さらに南京条約を境に前後期に分けられるとされているが、第1期全体としてはプロテスタント布教の活動が本格的に始まる前の「準備の時代」と位置づけられており、この時期については簡単にその概要が述べられているに過ぎない。この時期のキリスト教布教の状況については、日本においては吉田寅のキリスト教布教書に関しての一連の研究や²⁾、『遐邇貫珍』『六合叢談』など宣教師による刊行物に関する書誌学的研究³⁾を除けば、個別の宣教師に関する研究が散見されるのみである⁴⁾。

一方海外、特に欧米では個別の伝道会史料や宣教師史料を用いた研究が進んでおり、19世紀前半に活躍した宣教師について、また近年では彼らのもとにいた中国人信徒たちについてもより詳細な研究が行われるようになった⁵⁾。これらの研究によって、その人物の経歴や個性、そして彼らを取り巻く時代背景が明らかにされてきたわけだが、それらの人物同士の関係を含む当時のプロテスタント布教の全体像はまだ描かれてきていないように思われる。また、宣教師に関する研究の深さの度合いに比べ、宣教師と関わりのあった中国人の側についての研究は相対的にまだ不十分な点も多い。本稿では、これら宣教師たち横のつながり、また彼らと中国人たちとの関係を明らかにしてゆくことを主眼に、まず1807年からアヘン戦争前夜までのプロテスタント布教について、可能な限りその全体像を俯瞰してみたいと思う。

筆者はかつて、後期太平天国で活躍した洪仁玕のキリスト教信仰の背景を探るため、主に19世紀中期のロンドン伝道会の活動について研究した。本稿は、洪仁玕が出会った当時のプロテスタント布教の状況を時代をさかのぼって明らかにし、また太平天国運動そのものにキリスト教がどのような接点をもったかを再検討するという点でも意義あるものと考えている。

1. 中国におけるプロテスタント布教開始の背景

16世紀の宗教改革によって誕生したプロテスタント・キリスト教は、カトリックとの激

しい対立の中で、いくつかの分派（教派）を生みながら徐々にその形を整えてきた。18世紀に入ると当初の宗教的情熱も冷め、啓蒙主義や理神論など人間の理性を重んじる思想が主流となるが、18世紀後半、ヨーロッパ・アメリカのプロテスタントの間で再び情熱的な宗教復興運動が広がり、この運動がプロテスタント布教をアジアやアフリカにまで拡大させる原動力となった。

中国への最初のプロテスタント宣教師モリソンの出身国イギリスでは、この宗教復興運動はメソジスト運動⁶⁾を中心に展開し、これが英国教会内部における福音主義運動 (Evangelical Revival) を呼び覚ますと同時に、非国教派⁷⁾と呼ばれた諸教派の間にも福音主義回帰の流れを起こさせた。この非国教諸派を中心として 1795 年に組織された海外布教団がロンドン伝道会 (London Missionary Society) である。モリソンは非国教派の 1 つである長老派の信徒の職人の家庭に生まれたが、儀式よりも牧師の説教を、そして個人の回心体験⁸⁾を重視する福音主義の雰囲気の中で成長し、彼自身「回心」を体験した敬虔な信徒となった。モリソンは後に牧師になることを志し、信仰覚醒運動の中で成長を遂げた「最も有名で学問的レベルの高い」ホクストンの非国教徒学校⁹⁾に学んだが、在学中に海外布教に目を向けるようになり、ロンドン伝道会の報告を読んだり、またその 10 周年の記念集会での説教に心動かれ、ロンドン伝道会の宣教師になることを自ら志願したのである。

一方、上記イギリスのメソジスト運動に大きな影響を与えたのが、ドイツの敬虔主義の運動であった。これは 17 世紀後半に起こった教会改革運動であり、回心体験とともに、祈りや内省、そして聖書を読むことによって、自らの信仰を深化させてゆくことも重視しており、「神学論争や神学研究よりも生き生きとした内的信仰の生活を実践すること」を説くものであった¹⁰⁾。この運動は 18 世紀に入って「ヘルンフート兄弟団」¹¹⁾を中心に高揚期を迎え、ヨーロッパの他地域やアメリカに波及してゆくのである。後に個人宣教師として中国布教に携わり、聖書の翻訳や福漢会の創設などを通して、間接的ながら太平天国と深い関わりを持つことになるカール・ギュツラフ (Karl Gützlaff) は、この敬虔主義の思想に強く影響を受けていたとされる。さらにギュツラフの呼びかけに応じて中国に宣教師を送ったバーゼル伝道会やレニッシュ伝道会の宣教師らも、このドイツ敬虔主義の思想の薫陶を受けた人々であったという。

また、アメリカでも敬虔主義の影響を受け、18 世紀中期にニュー・イングランドの会衆派¹²⁾教会の中から信仰覚醒運動 (Great Awakening) が始まった。この運動は当時急速に広がりつつあったユニテリアン¹³⁾などのリベラル派に対抗する形で発展し、厳格なカルヴァン主義を信奉しつつ、回心の体験を通じた魂の救済を重視する姿勢をとった。この運動は海外布教にも非常に積極的であり、カルヴァン主義の会衆派連合会が「(リベラル派に) 汚染されていないキリスト教」を次世代に伝えてゆくために設立したアンドーヴァー神学校の神学生の提言に基づいて、1810 年、海外布教団であるアメリカン・ボード (American Board of Commisioners for Foreign Missions) が組織された。アメリカ人で最初の中国への宣教師とな

ったブリッジマン (Elijah C. Bridgman) は、ニュー・イングランドの熱心な会衆派信徒の農夫の家庭に生まれ、アンドーヴァー神学校で学び、アメリカン・ボードから海外へと派遣された、まさに信仰覚醒運動から生まれた典型的な宣教師の一人であった。

このアメリカの信仰覚醒運動は会衆派のみならず、長老派やクエーカー派まで幅広くプロテスタント諸派の間に広がった。幼児洗礼¹⁴⁾に肯定的であった他の諸派に対し、幼児洗礼を認めないバプテスト派はこの運動には比較的冷淡であったとされるが、それでも信仰覚醒運動はアメリカ南部のバプテスト派にも少なからぬ影響を与え、18世紀前半にバプテスト派もまた大きく勢力を伸ばしている¹⁵⁾。元来教会ごとの独立性、自立性を重んじるバプテスト派は他教派のようにまとまった連合体を形成することが困難であったが、海外布教という目的のために、1814年にはバプテスト・ボード (The Baptist Board of Foreign Missions in the United States) が設立され、中国へもシュック (Louis Shuck) やロバーツ (Issachar Roberts) といった宣教師がやってくることになる。

このように、プロテスタントの中国布教開始の背景には、欧米で大きな広がりを見せた福音主義の復興運動があり、この運動の影響を強く受けた長老派や会衆派、バプテスト派など、いわゆるピューリタンと称されるようなグループに属する者たちが宣教師として中国にやってきたことが分かる。彼らに共通しているのは、個人的な回心の体験や厳格で「聖潔」な信仰生活を重視していたことである。特にモリソンやギュツラフ、ブリッジマンらは自ら劇的な回心の過程を経験しており、中国布教を展開してゆく上でも、彼らと接触する中国人たちが彼らと同じような「回心」を経験するかどうかに関心を寄せた。しかしながら、彼らが実際に中国に来て中国語を学び、中国人たちと交流する中で、彼らが中国人に何を感じ、また中国人がキリスト教に改宗する時に、或いはしてから、彼らに何を求めるか、ということは個々の宣教師ごとに大きく異なっていたのであった。

2. モリソンとそのアシスタントたち

モリソンがロンドン伝道会に加入したのは1804年5月のことであった。その後モリソンは神学や古典などとともに医学や天文学、そして中国語を学びながら、渡航に向けて準備を進め、1807年1月、まずニューヨークへと向かった。当時イギリス東インド会社はその管轄地域内での宣教師の布教活動を歓迎しておらず、彼らがイギリスの船で直接インドや広州に行くことはできなかったからである。また、広州に着いたとしても、そこに居住できるかどうかは不透明であった¹⁶⁾。モリソンはニューヨークからアメリカの商船に乗って広東へと向かい、同年9月、マカオに到着した。ロンドン伝道会がモリソンに当面の方針として指示したのは、中国語をマスターすること、そして辞書を作り、聖書の中国語訳を行うことであった。中国語を身につけた後、広州に残るのか、あるいは別な地に移るのかはモリソンの判断に委ねられた¹⁷⁾。

当時、広州での欧米人との貿易は冬季に限られており、欧米人が広州の商館に居住できる

のも冬季だけであった。夏季も広州周辺に残りたい欧米人はその間マカオに居住したが、広州にせよ、マカオにせよ、イギリス人は東インド会社の関係者でなければ居住することは許されなかった。しかしモリソンはアメリカ人商人の協力を得て貿易シーズンの開始とほぼ同時に広州に渡り、翌年の6月まで広州で暮らした。

ところで、モリソンはこの間に完全に中国式な生活を送ろうと試み、挫折するという経験をしている。当初はアメリカ商館の一角に部屋を借りていたが、家賃が高く、また「現地の人々と同じように暮らすことは〔布教という〕目的に達することを容易にしてくれる」と考え、ある洋館の1階の倉庫として使われていた部屋を借り、そこで中国語の教師や使用人とともに暮らし始めたのである。中国式の衣服を着て中国人と同じ食生活をし、さらには髪を弁髪にし、中国人風に爪も伸ばすという徹底ぶりであったが、数ヶ月もしないうちに「ほとんど命の危険にさらされるほど」に体調を崩してしまう。その後、モリソンは別な洋館を借り、食生活はもちろん生活スタイル全般をもとの西洋式に戻したのであった。モリソンは「中国人たちと一緒に食事をして中国語の知識は増えず、急いで食べる食事の時間から得るものはほとんどない」と感じたのだという。得るものがなく思えたという点では中国式の衣服や弁髪なども同じであった。モリソンは、現地の暮らしに同化することが布教に役立つという考え方は、少なくとも当時の中国の状況においては「誤り」であると考えたのであった¹⁸⁾。

さて、モリソンは2年目もマカオと広州を行き来する生活を送ったが、商業活動に従事せず、しかもプロテスタントの宣教師という身分であったため、長期的な居住の許可を得ることが難しく、一旦はペナンへの移動を決意した。しかし1809年2月、イギリス東インド会社が通訳としてモリソンを雇うことを申し入れ、これを受諾したモリソンは年間を通して広州またはマカオに居住することが公に認められることになった。以後モリソンは通訳として働きながら、辞書の執筆や聖書の翻訳などを進めてゆくことになる。

まずモリソンはすでにカトリックの宣教師によって訳本が出されていた新約聖書の『使徒行伝』を翻訳し直すことから始め、1810年にはこれを広州で出版した。その後さらに新約聖書の翻訳を進め、1813年の末には全編の中国語版の印刷にこぎつけている。また教理問答や賛美歌なども出版されたほか、短編の布教文書も印刷され、モリソンのアシスタントやモリソン本人によって配付された。

なお、1813年にはロンドン伝道会からミルン (William Milne) が宣教師として派遣されたが、長期的に広州やマカオに居住できる見通しが立たず、マラッカで現地の華僑への布教を行うことになった。マラッカには、かねてからモリソンが計画していた英語と中国語の両方で教育を行う学校が設立されることとなり、1820年、ミルンが院長となって「英華書院 (Anglo-Chinese College)」が開校した。

また、1817年にはメドハースト (Walter Henry Medhurst) もマラッカに到着している。メドハーストは当初宣教師ではなく印刷工として派遣され、ミルンのもとで聖書の印刷に従事

していたが、その間に中国語を習得し、布教活動にもその才能を発揮したため、1819年、牧師に叙任された。以後メドハーストはペナンに移り、さらにその後バタヴィアに移って華僑への布教活動に従事した¹⁹⁾。その後もロンドン会からは数名の宣教師が派遣されたが、いずれもマラッカやバタヴィア、シンガポールなどで華僑への布教を行っていた。

一方、モリソンは1819年の11月に旧約聖書の翻訳も完成させており、また、もう一つの任務であった辞書についても1823年までに6冊本として出版が完了している。モリソンが中国語を習得し、これらの翻訳や執筆、そして印刷を進めてゆく上で、中国人教師やアシスタントの存在は欠かせないものであった。彼らの中では中国で最初のプロテスタント信徒となった蔡軻 (Tsae A-ko)²⁰⁾ や、最初の伝道師となった梁發が著名であるが、他にも数名の中国人たちがモリソンと深い関わりを持っていた。

モリソンは到着直後から、身の回りの世話をする使用人や中国語の教師を雇い、彼らと生活を共にしながら翻訳などに携わり、日曜日には彼らも交えて賛美歌を歌い、聖書を読んでモリソンが説教するという礼拝を自宅で行っていた。この生活スタイルは東インド会社の通訳となっても変わっていない。このように日常的にモリソンと一緒におり、聖書やキリスト教について見聞きするようになった中国人は、モリソンの中国での20数年に渡る生活の中で10名ほどいたが、彼らの中でもモリソンとの関わりが比較的長く続いたのが蔡軒、蔡軻、蔡運の3兄弟と、中国語の教師葛茂和であった。

蔡軒はモリソンとほぼ同じ年齢で、若くして両親をなくし、1808年からモリソンのもとでアシスタント兼広東語の教師として働くようになった。弟の蔡運と蔡軻も買い物などの身の回りの世話をする使用人として雇われ、いずれもモリソン宅の日曜日の礼拝に参加するようになった。蔡軻は間もなくモリソンのもう一人の中国語教師と争いを起こし、その教師とともに解雇されてしまうが、礼拝には出席し続けており、1812年の10月には、偶像崇拝をやめイエスを信じることにしたとモリソンに告げている。モリソンは蔡軻に洗礼を施すことを考えたが、「知識がまだ不十分で、その信仰も一時的なものに過ぎないのではないかと恐れ」、実行に移さなかった。蔡軻はその後、兄たちに知らせずに極秘に洗礼を受けたいと申し出たが、モリソンは承諾せず、教理問答書の学びなどを続けた後、1814年7月になってようやく蔡軻に洗礼を施した²¹⁾。蔡軻についてモリソンは「気性が荒く、しばしば兄やその他の家族と対立していた」と述べており、その後も蔡軻は続けて礼拝に参加しているがモリソンが期待したほど「従順にはならなかった」という²²⁾。それでもモリソンは蔡軻の信仰は真剣なものであったと考えていたようであるが、蔡軻は1818年10月、肺病でこの世を去った²³⁾。

一方兄の蔡軒については、モリソンは当初「私の相棒であり家庭教師」と述べており、信頼度が高かったことが窺われるのであるが、1810年に『使徒行伝』を印刷した際、蔡軒が印刷代を水増ししていたことを後からモリソンに告白するという一件があり、モリソンの蔡軒への信頼を揺るがせることとなったようである²⁴⁾。蔡軻の洗礼について述べた同じ手紙の

中で、モリソンは、蔡軒は「穏やかで思慮深いが、恐らく、心の中では福音に反感を抱いているのではないと思う。主の日（日曜日）の説教には休まず参加しているが、不誠実と不正直は中国人にしみついた悪徳なのである」と述べており²⁵⁾、蔡軒個人を乗り越して、実は「中国人」全体にまで及ぶ不信感を抱いていたことが分かる。蔡軒は達筆だったため、聖書や辞書の版木作成のために清書する仕事をしていたようであるが、印刷事業の中心がマラッカに移ると仕事がなくなり、1816年にはモリソンのアシスタントを解雇された。しかしモリソン宅の礼拝にはその後もしばしば訪れていたようである。時々モリソンの日記に登場し、キリスト教への理解や信念が深まっているようだ、と述べられており、1822年には自らモリソンに洗礼を受けたいと志願しているが、結局モリソンが蔡軒に洗礼を施すことはなかった。モリソンは1823年末にイギリスに一時帰国し、1826年9月に再び中国に戻ってきたが、その後も蔡軒はモリソン宅の礼拝に来ていた。1826年11月、モリソンは以下のように述べている。「新約聖書の印刷のために最初に清書の仕事をしてくれた彼（蔡軒を指す）は、真理への確信が深まったことを自ら認めています。（礼拝に来ている）他の者たちにとっても、聖書の言葉がそれを聞く者の心に育ってくれることを願っています。このような偶像に満ち、偶像崇拜者に囲まれた土地では、貴賤を問わずどこでもイエスの教えに対する迫害が起こるのですから、ニコデモのような者が、あるいは教会史家ミルナーの言うところの“異教徒信者”——知識が不完全で、臆病な、或いは秘密裏に信仰告白するようなキリスト信者——が多いとしても驚くには足りません」²⁶⁾。モリソンは「異教徒信者」という信仰のあり方を否定はしないものの、そのような者に積極的に洗礼を施し、正式なキリスト教徒として認めることはしなかったのである。

なお蔡運は、1818年頃から一時期シンガポールの別の宣教師のところで働いていた以外は、使用人としてずっとモリソンの側にいたようである。モリソンは一時帰国の際使用人を一人同行させたが、それもこの蔡運であったと思われる²⁷⁾。

上述の蔡兄弟と並んでモリソンとの関係が深かった中国語の教師葛茂和は、1808年に蔡軻とともに解雇された教師の後任としてモリソンに紹介された人物である。葛は祖父が役人をしてしたが、自らは教師をして生計を立てており、モリソンに紹介された当時は広州で私塾を開いていたという。それまでモリソンを教えていた中国語の教師たちは官話だけ、または広東語だけしか話せなかったり、或いは文字は書けなかった、さらには天主教徒だったので意見が合わなかった、性格が合わなかった等々の理由でモリソンにとって理想的な教師とは言い難い人物ばかりであった。しかし葛は教養もあり、読み書きはもちろん、官話にも広東語にも通じており、また「温和で気だての良い性格」であった²⁸⁾。モリソンは中国語をある程度身につけた後、中国人についてより良く理解するためには儒家の教えを知らなければならないことに気づき、葛のもとで四書の研鑽も積んでいる。また葛はキリスト教の書物の翻訳にも喜んで協力し、8年半にわたって、モリソンの聖書や賛美歌の翻訳や辞書の執筆をサポートした。葛茂和はモリソンが全くマイナスの評価を与えなかった極わずかな中国人の

一人であったという²⁹⁾。

葛はモリソン宅の礼拝にも熱心に参加し、聖書の教えに耳を傾けた。1812年11月22日のモリソンの日誌には、葛がキリスト教について語った言葉が残されている。葛は「偶像を崇拝することが間違っているということには納得したが、天を拝することはやはり妥当だと思う」と述べ、また「人々を愛するように、また敬虔に生きるようにと求めるキリストの教えは非常に良いものであるし、また将来の永遠の幸福と苦しみについての教えも、誰にとっても分かりやすいものである。ただ、福音の中の大部分は理解しやすいが、中には自分にはその意味が分からない箇所もある」と述べたという³⁰⁾。モリソンによれば、葛が分からなかったこととは「彼自身の罪深さ」と「救い主のわざの必要性」、というモリソンにとって最も重要な教義であった³¹⁾。翌年2月には葛は洗礼を受けることをみずから志願し、ロンドン伝道会の本部宛に手紙を書いたが、数日後、キリスト教徒として公にその立場を示すことは難しいとして洗礼への志願を取り下げてしまったという³²⁾。結局その後も葛は洗礼を受けることはなかった。しかし、葛の信仰心が一時的なものにすぎなかったとは言えないように思われる。その後も葛は熱心に祈祷会や礼拝に参加しており、自分が祈祷会の時間にいられない時にはわざわざその時間を早めてくれるようモリソンに頼むこともあった。また1814年1月には葛がモリソンのもとで働いていることが広東巡撫に知られ、一旦モリソンのもとから離れなければならなくなったが、その時葛は「モリソンのもとを離れる償いとして、モリソンから教わった教えを広め伝えるよう努力する決意をした」と述べたという³³⁾。この時は短期間逃亡してただけであったが、1817年2月にはついにマカオの印刷所が清朝の官兵によって摘発を受け、書籍や活字が没収されるという事件が発生し、その後外国人のもとで働く中国人に対する締め付けが厳しくなったため、ついに葛茂和はモリソンのもとを完全に離れることになった³⁴⁾。こうして8年半にわたるモリソンとの雇用関係は終わるのであるが、その後モリソンと全く連絡が無くなったわけではなく、モリソンが一時帰国から戻った後の1827年1月の日記には、広東の自宅での集会に葛がなおも参加していたことが記されている³⁵⁾。

このように葛茂和は「キリスト教徒」に非常に近いところにいた人物であったことが分かるのであるが、モリソンは結局彼に洗礼を施すことはなかった。モリソンにとっては、自らの信仰を公にすることは「キリスト教徒」として欠くことのできない条件であったのである。その意味では、はばかりことなくキリスト教信仰を公にし、布教に尽力した最初の中国人信徒は梁発であった。

梁発は広東省の出身で、1810年頃から蔡軒とともに聖書の印刷に携わっていた印刷工であった³⁶⁾。その後、ミルンがマラッカで聖書の印刷を行うことになった際、アシスタントとしてマラッカに連れて行った人物である。1816年11月、ミルンから洗礼を施され、キリスト教徒となった。梁発は入信後、数度故郷に帰っているが、その際偶像崇拝に明け暮れる近親者を説得するために布教パンフレットを自ら執筆するようになった。また、梁発は妻を

キリスト教信仰へと導き、梁發自身が洗礼を施したという。1822年にミルンがマラッカで死去し、梁發は翌年には広東に戻って来たが、間もなくモリソンは一時帰国の途に就くことになった。その際、モリソンは梁發を伝道師として叙任し、留守中の布教活動を彼に一任したのである。同時に梁發はロンドン伝道会から給料を支給される、同会の正式なアシスタントとなった。

3. 新たな宣教師の派遣と内地布教への布石

モリソンは1823年11月にマカオを出発して帰国し、1826年9月に再びマカオに戻ってきたが、相変わらず中国本土で布教活動に携わる宣教師は彼一人という状況であった。モリソンはたびたびロンドン伝道会本部に新たな助っ人の派遣を要請したものの、イギリスからの新たな宣教師の派遣は行われなかった。そのような中、アメリカン・ボードが中国に宣教師を送ることを決定し、1830年2月、2名の宣教師がマカオに到着する。中国人への布教に携わるため派遣されたブリッジマンと、広州で貿易に従事するアメリカ人のための牧師として派遣されたアビール (David Abeel) であった。2人はモリソンから温かい歓迎を受け、ブリッジマンはすぐにモリソンに紹介された中国人教師のもとで中国語の学習を開始した。同年の11月には梁發のパンフレット作成に協力するなど、布教活動にも関わるようになっており、また、1832年からは *Chinese Repository* の編纂・発行にも携わるようになった。なお、1833年にはブリッジマンを補佐する印刷技術者としてウィリアムス (Samuel Wells Williams) が到着している。

ところでブリッジマンは1830年の年末頃から、モリソンが幼児洗礼を授けた梁發の息子進徳をはじめ、3人の中国人の子供を家に住ませ、英語とキリスト教を教えるようになった。このような、中国人の子供や若者を生活環境ごと西洋化させるという教育方法は、後にブリッジマンを中心として設立されるモリソン教育協会 (Morrison Educational Society) の教育方針へとつながるものであった。モリソン教育協会の発足の際、ブリッジマンは中国人に英語を教えることは彼らに「賢明で勤勉でまじめな、そして高潔な社会の一員となり、それぞれの生活の場に適応しながら、彼ら自身とその近親者、国家、そして神に対して負うべき義務を果たすために必要な全ての知識を得させる」ことになるのだ、と述べている³⁷⁾。ここに描かれている生活のありようは、まさにブリッジマンの信仰的な背景でもあるピューリタニズムの色彩の濃い、道徳的で潔癖なキリスト教徒のそれであるが、英語教育によってこれがもたらされるとされているところが興味深い。もちろんブリッジマンは中国語や中国の歴史、文化を学ぶことにも熱心であったが、布教の基本的なスタンスは、自分たちから中国人の中に入りこんでゆくと言うよりは、中国人の側を彼らの枠組みの中に取り込むことを目指すものであったと言えよう。

一方、ドイツ人宣教師ギュツラフも、1831年以降、数度にわたって中国の沿海を航行しながら布教パンフレットを配布する旅行を行っている。ギュツラフはもともとはオランダ伝

道会の宣教師として 1826 年にバタヴィアに派遣された。バタヴィア到着後しばらくの間メドハーストの家に同居しており、メドハーストからマレー語と中国語の手ほどきを受けた。その後中国布教を志したギュツラフは、1829 年にオランダ伝道会を脱会して個人宣教師となり、バンコクに拠点を置いてタイ語の聖書翻訳などをすすめる一方、当地の華僑への布教を行った。また、一時期マラッカのロンドン伝道会支部の管理を預かったこともあったという。その後、妻の死を契機にギュツラフはかねてから計画のあった中国沿海での伝道旅行に踏み切り、1831 年 6 月、中国人商人のジャンク船でバンコクを出発した。

ギュツラフは先に述べたモリソンやブリッジマンとは異なり、自らが中国人になりきることを躊躇なく試みた人物である。この中国沿海旅行に踏み出す数年前に、すでにバンコクに住む福建省にルーツを持つ郭一族と親交を結び、自らこの一族の一員として「郭實獵」という中国名を名乗るようになっていた。衣食住の全てを中国風にしてもギュツラフは平気であったらしく、この時の旅行も福建人の医者装束の航海であった。一行は沿岸を天津・遼東半島まで航行し、ギュツラフは医薬品や聖書、布教書などを配付したあと、同年 12 月マカオでジャンク船を降りた。そのままモリソンのもとを訪ね、温かく迎えられたという。

翌 1832 年 2 月、ギュツラフは北方での貿易の拡大を探るために中国沿海へと向かう東インド会社の船に通訳兼医者として乗り込み、厦門、福州、寧波、朝鮮、琉球などを訪れた。行く先々でギュツラフは、集まった人々にキリスト教について語り、モリソン・ミルン訳の聖書やさまざまな布教書を配付している。同年 9 月にマカオに帰港すると、ギュツラフは今度はアヘンの密貿易に携わっていた商人ウィリアム・ジャーディンとジェームズ・マセソンの所有する武装したアヘン密輸船にやはり通訳兼医者として乗り込み、布教書の配布を続けた。その後もギュツラフは 1835 年までの間に少なくとも 4 回、ジャーディン・マセソン商会の密輸船の航海に通訳として同行し、布教書の配布を行ったという³⁸⁾。

このようにギュツラフが立て続けに航海に出たのは、個人宣教師であったため収入源——すなわちこの場合は通訳という仕事——を確保する必要があったから、という事情もあったようだ。しかもウィリアム・ジャーディンは航海途中での布教書の配布にも協力的であったし、ギュツラフが刊行していた『東西洋考毎月統紀伝』の出版費用も援助すると申し出た。とは言え、ギュツラフは本来アヘンには反対で、かつてアヘンの害を説くパンフレットを書いたり、アヘンをやめさせるための薬を配付したりしたこともあった。そのため、ウィリアム・ジャーディンから通訳のオファーが来たとき、ギュツラフは「他の人々とよく相談し、自分の心の中で葛藤した」のであるが、結局はこれを布教のチャンスと捉え受諾したのであった³⁹⁾。相談相手の一人にはおそらくモリソンも入っていたであろうと思われる。というのも、モリソンはギュツラフがジャーディンの船で最初の航海に出た直後の 1832 年 10 月 29 日の手紙の中で、「嬉しいことに、広州から中国語の聖書、祈祷書と布教文書一箱分を中国北部と朝鮮、日本に向けて送っています。最近までバンコクにいたギュツラフ氏がその任に当たっています」と述べているからである⁴⁰⁾。モリソンもまたギュツラフのこの航海を

布教のための大きなチャンスと受け止めたのである。だが、ギョツラフを乗せている船の素性については何も語っていない。いずれにせよ、これらの航海を通して、厦門や上海、天津などにおいてキリスト教の布教書がかなりの規模で配付されたことは確かであった。

一方、1830年代の最初の数年は、梁發ら中国人アシスタントによる広州周辺での布教活動が非常に活発に行われた時期でもあった。ブリッジマンは1830年3月に初めて梁發に会っているが、そのころ梁發は「広州から50-100マイル離れたところ〔梁發の故郷がある高明県〕に住んでいて、家々を回って福音を説いているほか、キリスト教の文書を印刷したり配付したりもして」いたという⁴¹⁾。梁發はこの2年ほど前に故郷に私塾を開き、そこでキリスト教の教えを広めようとしたが、一部の親戚から迫害を受けて私塾を閉鎖し、1829年の初めにはマカオに逃げてきていた。この年の暮れ、再び故郷に戻り、パンフレットの印刷と布教活動を再開していたのである⁴²⁾。

1830年2月には新たにもう一人の中国人がモリソンから洗礼を受けた。梁發とともにかつてマラッカのミルンのもとで働いていた屈昂であった。屈昂はミルンのもとにいた頃に入信を考えたこともあったようだが、モリソンに紹介されるまでは「怠惰で行き当たりばったりの生き方をし、妻子の面倒も見ず、完全に家族を離れて定職にも就かずにはいた」という。しかし入信後は「世俗的な意味でも、また魂に対してという意味でも、家族の必要に心を砕くようになり」、梁發から印刷技術を学んで熱心にモリソンのために布教文書の印刷などを行うようになったという⁴³⁾。1831年にはロンドン伝道会のアシスタントとなり、梁發と同じく布教活動に一生を捧げることとなる。また、1831年頃から梁發は信者になろうとする者に積極的に自ら洗礼を施すようになっており、1832年の10月までに7名に洗礼を授けていたという⁴⁴⁾。彼らは梁發のアシスタントとして布教書の印刷や配付などに携わっていたが、モリソンやブリッジマンらが暮らす広州の商館とは別なところで活動していたらしく、ブリッジマンは1832年10月の日誌の中で、彼らのうちの数人にはまだ会ったことがないと述べている⁴⁵⁾。梁發の布教活動はかなり彼自身の裁量、指導の下で行われていたことがうかがえる。

この時期、梁發らは科学試験を受ける知識人たちへの文書を介した布教を積極的に行っていた。1830年の夏、梁發と屈昂は広州の西南400キロほどのところにある高州府〔現広東省茂名市〕まで出かけてゆき、科学を受けに来た若い知識人らに7,000部以上のパンフレットを配布したという⁴⁶⁾。また、梁發は新たなパンフレットの作成にも尽力しており、1831年には、その後精力的に配付されることになる『聖書日課初学使用』が出版された。これはイギリスの聖書日課の翻訳であったが、到着したばかりのブリッジマンや、モリソンの息子ジョンもその執筆に協力していた。さらに1832年には梁發の書き下ろしのパンフレット9編をまとめた『勸世良言』が出版されている。これらのパンフレットは1833年に広州で童試が行われた際にも、梁發自身の手によって配布された。*Chinese Repository*によれば、10月の試験では3,000部以上の布教書が配付されたという。林田芳雄の考証によれば、この10

月の試験は童試の第3段階である「院試」であり、受験者の一人であった洪秀全がこの時に梁發から直接『勸世良言』を受け取ったのだという⁴⁷⁾。さらに1834年8月には広州で郷試が行われ、ここでも梁發はアシスタントたちとともに大々的に布教書の配布を行おうとした。しかし、折からのイギリスと清朝との急速な関係悪化の影響を受け、この郷試の際の布教書配付は梁發らに思わぬ厄災を降りかからせることとなった。

1834年というのは、イギリス東インド会社の中国貿易独占権が撤廃された年である。イギリス政府はこれを機に従来の貿易システムを一新し、清朝と対等な外交交渉を行おうと試み、初代首席貿易監督官としてウィリアム・ネーピアを派遣した。ネーピアは7月16日にマカオに到着すると、モリソンを改めてイギリス政府の官僚として雇い入れることを申し入れ、モリソンはこれを受諾した。「これからは国王のボタンのついた副領事のコートを着ることになるのだ」とモリソンは誇らしげに家族への手紙の中で述べている。しかし、7月23日、清朝との交渉のためにネーピアと共に広州に向かったモリソンは折からの悪天候と暑さの中体調を崩し、そのまま8月1日に広州で死去してしまう。ネーピアはこの痛手にも関わらず、広州の清朝当局と対等に交渉するという使命を貫こうとし、8月25日には慎重の態度に強い不満を示す中国語の抗議文書を頒布した。しかしこのことが清朝側の態度をさらに硬化させることとなり、貿易が停止され、広州のイギリス人は強制的に退去させられた。これに対しネーピアは海軍力を行使して砲艦政策を実施しようとしたが、マラリアにかり、同年10月マカオで死去する。その結果、ようやくイギリスと清朝との貿易関係は一旦回復することとなるのであるが、この一連の緊張関係の最中に、梁發らに対する摘発事件が起こったのである。

梁發らが布教書の配布を始めたのは8月20日のことであった。まさにイギリスと清朝との緊張関係が頂点に達していた時期である。最初の2日間は『聖書日課初学使用』を1,000部ずつ配付するほど好調であったが、3日目以降清朝の取り締まりを受けるようになった。最初は連行される者が出てもすぐに釈放されたが、25日以降取り締まりが厳しくなり、梁發のアシスタントたちが次々と逮捕された。8月30日には南海県知県から、「人心を惑わし、害を与える外国の異端書籍」を印刷したり配付したりすることを厳禁し、そのようなことを行う者を厳しく処罰する、という布告が出され、さらに9月に入ると、外国人と関わりを持つ中国人が「漢奸」として厳しく取り締まられるようになり、梁發は名指しで追われる身となった。ついには梁發の故郷にまで官憲が乗り込む事態になったが、梁發は妻子を連れて逃げまわり、何とかマカオのブリッジマンのもとにたどり着いたものの、それ以上国内にいたことができず、ブリッジマンのもとに預けられていた息子進徳とともにシンガポールへと逃れた。その後梁發はマラッカに渡り、英華書院での印刷事業に携わることとなる。逮捕されていたアシスタントたちは、モリソンの後を継いでイギリス政府の書記兼通訳官となった息子ジョン・モリソンの尽力で保釈金を払って釈放されたが、以後、広州での中国人信徒による布教活動は大きく後退した⁴⁸⁾。

その後もアメリカ商館では密かに布教文書の印刷が続けられ、ブリッジマン、ジョン・モリソン、ギュツラフによってモリソンの生前から計画のあったモリソン・ミルン訳の聖書の改訂作業も進められた。しかしジョン・モリソンが父モリソンの後を継いでイギリス政府の書記に、ギュツラフもジョン・モリソンの後を継いで副書記のポストに就いたため、2人とも多忙となったうえ、ブリッジマンも *Chinese Repository* の編集などで忙しく、聖書の改訂作業はなかなか進まなかったようである。1835年6月、メドハーストが広州にやってきて聖書の改訂作業に加わるようになり、ようやく作業は急ピッチで進むことになる⁴⁹⁾。ところが、この年の6月にギュツラフが福建省への航海の途中で配付した布教書が清朝当局の目に触れ、9月にマカオで取り締まりが行われた結果、再び宣教師のアシスタントの中から逮捕者が出る事態となった。この時逮捕されたのは屈昂の息子屈熙であった。屈昂は難を逃れたが、結局これを機にマラッカに逃れることとなる。なお、この事件ではジョン・モリソンも出頭させられたが、屈熙の罪が重くならないように、またその父屈昂や梁発の所在についても沈黙を守りつつ巧みに証言をしたという⁵⁰⁾。その後、屈熙も釈放された。しかし、この事件によって広州での印刷事業はほぼ完全に不可能となり、モリソン・ミルン訳の聖書の改訂版もその後はシンガポールで印刷されることとなった。

このように広州やマカオでの印刷が困難になると、梁発や屈昂がいるマラッカやアメリカン・ボードの印刷所が置かれたシンガポールが中国語印刷物の主要な印刷拠点となる。この時期、上記の聖書の改訂版の他にも様々な書物が出版されたが、その原動力となったのが1834年11月に設立された「中国益知会 (Society for the Diffusion of Useful Knowledge in China)」であった。この会はジョン・モリソンが英語の書記 (English Secretary) を、ブリッジマンとギュツラフが中国語の書記 (Chinese Secretaries) を務め、西洋の有用な知識を中国語の書物の出版を通して広めることを目的としていた。ギュツラフが1833年に広州で発刊した月刊紙『東西洋考毎月統紀伝』も1837年以降はこの中国益知会が出版者となり、ブリッジマンやメドハーストもその編集に加わっている。また、ブリッジマンの『美理哥合省国志略』も中国益知会によって1838年に出版された。なお、ギュツラフはこの時期、『東西洋考毎月統紀伝』に掲載した各国の歴史・地理に関する文章を『猶太国史』や『古今万国綱鑑』、『万国地理全集』などの単行本に編纂して出版したほか、多くの布教パンフレットを出版している。

一方広州での直接的な布教活動は下火となったが、この間、モリソンを記念して1836年にはモリソン教育協会が、また医師であるピーター・パーカーの着任を契機として1838年には医薬伝道会 (Medical Missionary Society) が組織され、いずれもブリッジマンが理事または副理事として中心的な役割を果たした。

モリソン教育協会は、ブリッジマンとジョン・モリソンの他、ウィリアム・ジャーディン、D. W. C. オリファント、L. デントといった広州の有力な商人も理事会に加わっていた。中国の若者に英語を教える学校の設立ないし資金援助を目的とし、まずギュツラフ夫人がマ

カオで開いていた女子学校に資金援助を行い、男子学生も受け入れられるようにするのにも貢献したという⁵¹⁾。同協会は1839年にはマカオに「モリソン記念学校」を設立し、教育事業に直接参与するようになった。校長としてアメリカから招聘されたブラウン (Samuel R. Brown) 夫妻が少年たちと生活を共にしながら教育を行った。なお、先のギュツラフ夫人の学校の最初の男子学生となり、さらにモリソン記念学校の最初の学生ともなったのが、後に中国人初のアメリカへの留学生となる容閑であった。

医薬伝道会は1835年11月に広州に開設されたパーカーの病院の経営を円滑にすすめ、さらにその他の地域でも医療活動を展開することを目的に設置された。副理事としてパーカー、ブリッジマンと並んでウィリアム・ジャーディンも名前を連ねている。パーカーの病院は眼科の治療を希望する患者であふれたという。病院では改訂版の聖書も配付された。1838年には病院の増改築も行われている⁵²⁾。

このようにアメリカン・ボードの宣教師たちはモリソンの後を受け、出版や医療、教育などを通した布教活動に力を注いでいたわけであるが、彼らの身近なところで実際にキリスト教に帰依する者が出たかという、そうではなかったようである。ブリッジマンは1833年2月の手紙の中で、中国での3年間を通して中国人について学び、言語を身につけ、出版を行い、引き取った中国人の子供たちの世話をするなどしてきたものの、結局一人も新たな信徒を獲得することはできなかったと嘆いている⁵³⁾。梁発の息子進徳については、将来信徒になる見込みが一番高いとブリッジマンは考えていたようであるが、その進徳もはっきりとキリスト教の信仰を持っているとはブリッジマンには認められなかったようである。1834年の梁発に対する取り締まり事件をきっかけに、ブリッジマンが家に置いていた子供たちもブリッジマンのもとを去った。直接中国人に布教する機会はその後数年間失われたままであったが、1838年にはやや状況が改善し、梁発とともにシンガポールに渡っていた進徳も再びブリッジマンのもとに戻っていたほか、さらに3人の中国人の少年がブリッジマンのもとで教育されていたという⁵⁴⁾。しかしその後も彼らの中から新たに信徒となる者が出ることはなかった。

ところで、ちょうど広州での直接的な布教活動が下火になった時期に、新たにアメリカからやってきた宣教師たちがいた。バプテスト派のシュックとロバーツである。シュックはバプテスト・ボードの宣教師として派遣され、当初バンコクで支部を立ち上げるよう命じられていたのであるが、シンガポール到着後独断でマカオに行き先を変更し、1836年7月、マカオに到着した。マカオでは当初ギュツラフ夫妻の世話になっている。一年後には、マカオを出入りするジャンク船の乗組員に布教書を配付したり、ギュツラフが留守の時にはギュツラフ宅で毎日曜日に行われていた中国語の礼拝を取り仕切ったりするようになっていたようである⁵⁵⁾。

一方1837年5月、ロバーツもマカオに到着した。ロバーツはアメリカ南部のテネシー州の農民の出身で、ほとんど教育も受けていないが、熱心なバプテスト信者の母に育てられ、

25歳の時に牧師になった。その後一旦牧師をやめ農場経営をしていたが、ギュツラフの中国沿海での布教活動についてのレポートを読んだことで中国布教に目覚め、1835年、バプテスト・ボードに中国への宣教師として名乗りを上げる。ところがバプテスト・ボードが審議のためにロバーツを知る4名の牧師に意見を聞いたところ、全員がロバーツの牧師としての能力や学識、性格について疑問を呈したため、バプテスト・ボードはロバーツを宣教師として受け入れることは不適当であるとの結論を下した。しかしロバーツは自らの資産を元手に「ロバーツ基金」と「ミシシッピ流域中国伝道会」を立ち上げ、さらにミシシッピ、テネシー、ケンタッキーの各州の教会を回って資金を集め、これを後ろ盾として全くの個人宣教師として中国へと旅立ってしまう。ミシシッピ流域中国伝道会は発足するとすぐ、ギュツラフにこの会のメンバーとして加わってくれるよう要請し、快諾を得ていたため、ロバーツはマカオで早速ギュツラフに温かく迎え入れられた。バプテスト・ボードと直接のつながりはなかったものの、同じバプテスト派であるということで、シュックと一緒に行動することも多かったようである⁵⁶⁾。

このバプテスト派の宣教師たちは、かなり早い時期からブリッジマンらアメリカン・ボードの宣教師たちとの間に、衝突とまでは言えないまでも、微妙な軋轢を生じさせていた。コフリンによれば、それは「洗礼」の儀式、および布教方法をめぐる見解が異なっていたことによるものだったという。バプテスト派は幼児洗礼を認めず、洗礼の方法も他の教派とは大きく異なっており、シュックは到着早々からブリッジマンにこの問題について議論を持ちかけていた。また、聖書の“baptism”という言葉をもどのような中国語に訳すかということでもブリッジマンらとは意見が合わなかったが⁵⁷⁾、結局両者はバプテスト派が独自のバージョンの中国語聖書を作ることで同意したという。また、布教方法ということでは、シュックらは文書伝道や教育、医療を通した伝道ではなく、直接中国人たちの中に入って行って説教をし、教会を作ろうとした。すでに梁發や屈昂の身辺に危険が及び、逮捕者を出す事態を経験していたブリッジマンたちにしてみれば、シュックたちの行動は清朝政府を必要以上に刺激するものであり、広州やマカオからアメリカ人宣教師が追放されかねないとの懸念を持った。また、神学の専門的な知識を学び、中国の伝統的な文化にも学ぶ姿勢を持っていた、いわば「学者」的な気風を持っていたブリッジマンらに対し、シュックやロバーツはより情熱的に、アグレッシブに「福音」を伝えようと意気込んでいた。彼らのバックグラウンドであるアメリカ南部のバプテスト派は、西部開拓の最前線で信者を獲得していた教派である。彼らの間では、牧師には教育や訓練以上に敬虔さと情熱が必要であるという意識が強く、学があることと信仰を持つことは両立しないと考える者すらあったという⁵⁸⁾。モリソン、ブリッジマン、ギュツラフ等々、これまで中国布教を志して集まってきた宣教師たちは教派や考え方の違いはあっても、聖書の翻訳や布教書の配布、或いは中国益知会やモリソン教育基金の設置などでも協力しあってきた。しかしシュックやロバーツは、もちろん他の宣教師との協力を重んじていなかったわけではないものの、それ以上に自派の教義や信念に対するこだわ

りが非常に強く、彼らの登場は従来の宣教師間の関係に微妙な変化を及ぼすことになった。特にアメリカン・ボードの宣教師たちには、今なお信徒の獲得という面においてめざましい成果のない中、アメリカの中国布教の担い手をバプテスト派に取って代わられるのではないかという危機感をも抱かせることになるのである。

おわりに

以上述べてきたように、19世紀前期に中国にやってきたプロテスタントの宣教師たちは、欧米での信仰覚醒運動という共通の底辺をもちつつも、各々信仰的な背景も性格も異なっており、中国人への接し方や布教のスタンスは様々であった。それでも彼ら宣教師間では生活面においても布教面においても、程度の差こそあれ、様々な形で協力関係が成り立っていた。しかしその一方で最初の約30年の間に獲得された信徒はわずか10数名に過ぎず、しかもその多くが梁發の布教によって獲得された信徒であった。そしてその梁發の布教活動は、宣教師主導で行われたと言うよりは、むしろかなりの部分梁發自身の裁量に任されていたことが特徴的である。1830年代初めという時期に梁發がかなり自由に活動できる空間があったことが、『勸世良言』などの梁發オリジナルの布教書を生み、さらにそれらを科挙の試験場で配付する活動へとつながったのであり、結果的に後の太平天国運動を生じさせるきっかけともなったと言えよう。

本稿で見てきた宣教師同士の関係や、中国人との関係は、こののちアヘン戦争を経て中国内地における布教活動が拡大してゆく中でさらに変化を遂げ、また、太平天国とのつながりという意味でもより直接的な接点が生じてくるのであるが、それらについてはまた改めて論じることとしたい。

註

- 1) 山本澄子『中国キリスト教史研究』（増補改訂版）、山川出版社、2006年、13-14頁。
- 2) 吉田寅『中国キリスト教伝道文書の研究——『天道溯原』の研究・附訳註——』汲古書院、1992年。同『中国プロテスタント伝道史研究』汲古書院、1997年。
- 3) 沈国威編著『『六合叢談』(1857-58)の学際的研究』白帝社、1999年。松浦章等編著『遐邇貫珍 附解題・索引』上海辭書出版社、2005年。
- 4) 都田恒太郎『ロバート・モリソンとその周辺』教文館、1974年。同『ギュツラフとその周辺』教文館、1978年。また聖書翻訳の視点からの研究であるが、モリソンについて比較的詳しく述べてあるものとして柳父章『ゴッドと上帝』筑摩書房、1986年がある。
- 5) 宣教師研究については主なもの本文で参照しているので該当部分の註を参照されたい。ここでは特に中国人信徒にまで目を向けた研究として、以下の3点を挙げておく。
Jessie G. Lutz and Rolland Ray Lutz, *Hakka Chinese Confront Protestant Christianity, 1850-1900*, (M. E. Sharpe, 1998). 蘇精『馬禮遜與中文印刷出版』台湾學生書局、2000年。同『上帝の人馬 十九世紀在華傳教士的作為』基督教中國宗教文化研究社、2006年。
- 6) ウェスレー兄弟らを中心に進められた福音主義運動で、後には国教会から独立してメソジスト教

- 会を建て、アメリカにも大伝道を行った。『キリスト教大事典（改訂新版）』教文館、1985年、参照。
- 7) 英国教会以外の諸派のことで、長老派、改革派（以上はカルヴァン主義派）、会衆派、バプテスト派、クエーカー派などを指す。
 - 8) 『キリスト教大事典』によれば「キリストによる罪のゆるしと洗礼によって引き起こされる心の大きな転換」とある。特に信仰覚醒運動時には「回心とは、明確に経験できる激しい心の変化であり、更にそのあとに完全な聖潔の生活が続かなければならないとされ」たという（195頁）。
 - 9) 非国教徒学校は、17世紀後半に英国教会から迫害を受けた非国教徒が子弟のために作った学校であったが、非国教徒への取り締まりが緩和されると急速に広がり、18世紀末まで、イギリスの学校制度の1つの柱となるほどに発展した。古典や神学などのほかに自然科学、数学や技術教育を行った点が特徴であったという。浜林正夫『イギリス宗教史』大月書店、1987年、207頁。
 - 10) 半田元夫他『キリスト教史Ⅱ 世界宗教叢書2』山川出版社、1977年、308頁。
 - 11) 15世紀初頭のチェコの異端者ヤン・フスの流れを汲む「モラヴィア兄弟団」がザクセンの領主の保護を受けて移住し、組織した教団。半田元夫他『キリスト教史Ⅱ』310頁、浜林正夫『イギリス宗教史』191頁。
 - 12) 16世紀中頃からイギリスにおいて教会の国家からの独立などを主張し、国教会から分離した一派で、迫害を受けてオランダに逃れた後、アメリカに渡った。「ピルグリム・ファーザーズ」とは彼らを指す。ニュー・イングランドで積極的に教会建設を行った。
 - 13) 三位一体論に反対し、イエスの神性を否定する教派およびその主張を指す。『キリスト教大事典』、参照。
 - 14) 幼児が両親の信仰によって受ける洗礼であり、本人が教会の一員として認められるためには、成長後改めて自己の信仰を表明し、所謂「堅信礼」を受けることが求められる。
 - 15) 半田元夫他『キリスト教史Ⅱ』280頁。
 - 16) Eliza Morrison ed., *Memoirs of the Life and Labours of Robert Morrison*, (London: 1839), vol. 1, 93.
 - 17) Ibid., 96–97.
 - 18) Ibid., 187–189, 194–195.
 - 19) Alexander Wylie, *Memories of Protestant Missionaries to the Chinese*, (Shanghai: Presbyterian Press, 1867), 25.
 - 20) モリソンの日誌や手紙には Tsae A-ko, A-fo などと表記され、漢字名は不明である。従来「蔡高」の字が当てられてきたが、本稿ではモリソンの教師やアシスタントについて詳細な研究を行っている蘇精氏に従い、「蔡軻」とした。以下に登場するモリソンの教師らの漢字名も蘇精論文に倣った。蘇精「馬礼遜の中文印刷出版活動」、「馬礼遜和他的中文教師」、同『馬礼遜与中文印刷出版』所収、参考。
 - 21) Morrison, *Memoirs*, vol. 1, 345, 408–410.
 - 22) Ibid., 409, 439.
 - 23) Ibid., 531.
 - 24) Ibid., 238; 蘇精『馬礼遜与中文印刷出版』22–23頁。
 - 25) Morrison, *Memoirs*, vol. 1, 409.
 - 26) Ibid., 359. ニコデモは新約聖書に登場する人物で、イエスに敵対する立場にありながら、密かにイエスを訪ねて問答したり、イエスを弁護したりした（『ヨハネによる福音書』第3, 7章参照）。

ミルナーは *The History of the Church of Christ*, (London: 1809) の著者。

- 27) Morrison, *Memoirs*, vol. 2, 235.
- 28) Ibid., vol. 1, 343.
- 29) 蘇精『馬礼遜与中文印刷出版』74 頁。
- 30) Morrison, *Memoirs*, vol. 1, 346.
- 31) Ibid., 353.
- 32) 蘇精『馬礼遜与中文印刷出版』73 頁。
- 33) Morrison, *Memoirs*, vol. 1, 377.
- 34) Ibid., 474.
- 35) Ibid., vol. 2, 378.
- 36) 以下の記述は麥沾思著、胡簪雲訳、上海広学会重訳『中華最初の布道者梁發』(『近代史資料』第 39 号 (1979 年) 所収、142-221 頁) による。
- 37) “Morrison Education Society,” *The Chinese Repository*, Dec. 1836, (reprint, Tokyo: Maruzen Co., 1941), vol. V, 379.
- 38) Jessie G. Lutz, *Opening China, Karl F. A. Gutzlaff and Sino-Western Relations, 1827-1852*, (Erdmans, 2008), 83.
- 39) Karl Gutzlaff, *Journal of Three Voyages along the Coast of China in 1831, 1832, & 1833*, (reprint, Desert Island Books, 2002), 201. 3 回目 (ジャーデインの船での最初) の旅行記の冒頭部分。しかし「葛藤」の原因であるアヘン貿易との関わりは旅行記の中では一切触れられていない。
- 40) Morrison, *Memoirs*, vol. 2, 458.
- 41) Eliza J. Gillett Bridgman ed., *The Pioneer of American Missions in China: the Life and Labors of Elijah Coleman Bridgman*, (New York, 1864), 44.
- 42) Morrison, *Memoirs*, vol. 2, 436, 439.
- 43) Wylie, *Memorials of Protestant Missionaries*, 11; Morrison, *Memoirs*, vol. 2, 440.
- 44) Morrison, *Memoirs*, vol. 2, 462.
- 45) Bridgman, *The Pioneer of American Missions in China*, 76.
- 46) Wylie, *Memorials of Protestant Missionaries*, 12. 麥沾思『中華最初の布道者梁發』169 頁。
- 47) 林田芳雄「『勸世良言』授受年代に関する一考察」。同『華南社会文化史の研究 京都女子大学研究創刊 21』京都女子大学、1993 年、423-454 頁。
- 48) Bridgman, *The Pioneer of American Missions in China*, 92-95.
- 49) なお、メドハーストは 1835 年 8 月から 10 月にかけて、スティーブンスとともに中国沿海部を旅行し、山東省まで達している。彼らはアヘン密輸船での航行を嫌い、運良くアヘン貿易をしていないオリファント社の船をチャーターしての航海となった。メドハーストは 1836 年 4 月にはバタヴィアに戻り、そのままイギリスに帰国、1838 年 11 月に再びバタヴィアに戻ってきた。中国沿海の布教旅行については、W. H. Medhurst, *China: Its State and Prospect, with Especial Reference to the Spread of the Gospel*, (London, 1838), 367-531 を参照のこと。
- 50) 菊池秀明「洪秀全の挫折と上帝教——檔案資料からみた太平天国前夜の広東社会——」『東洋文化研究』第 10 号、学習院大学東洋文化研究所、2008 年 3 月、147 頁。
- 51) Michael C. Lazich, *E. C. Bridgman (1801-1861), America's First Missionary to China*, (The Edwin Mellen Press, 2000), 102-103. ギュツラフは 1834 年春にマラッカを訪れ、そこでイギリス人宣教師マリー (Mary Wanstall) と再婚した。彼らは同年 11 月にマカオに居を構え、すぐにマリーは自

- 宅に女子学校を開いた。Lutz, *Opening China*, 61.
- 52) Lazich, *E. C. Bridgman (1801-1861)*, 107-108.
- 53) American Board of Commissioners for Foreign Missions (以下 ABCFH と略記), *Annual Report*, 1833.
- 54) ABCFM, *Annual Report*, 1839. この他、聖書改訂のためのアシスタントとして、梁發から洗礼を受けた中国人信徒が一人いた。
- 55) Margaret M. Coughlin, *Strangers in the House: J. Lewis Shuck and Issachar Roberts, First American Baptist Missionaries to China*, (University of Virginia, 1972), 23, 27. シュックはマカオ到着早々、広州や海南島に拠点を置こうとしたが、当時の情勢がそれを許さず、マカオに留まった。
- 56) 以上のロバーツに関する記述は Coughlin, *Strangers in the House*, 37-44 による。
- 57) Coughlin, *Strangers in the House*, 49, 52. バプテスト派は個々人が回心の後に洗礼を受けるべきであると考え、幼児洗礼を認めなかった。また、他教派の洗礼は頭に水を垂らす方式であったのに対し、バプテスト派は全身を水に浸す方式（現代日本語・中国語では「浸礼」）を主張した。したがって、バプテスト派にしてみれば、“baptism” の訳語には「浸」の文字が入ることが必須だったのである。なお、モリソン訳の聖書ではこの語は「洗礼」とされており、梁發も『勸世良言』の中で「洗礼」を使っている。
- 58) Coughlin, *Strangers in the House*, 4.